

KULIC

2

慶應義塾大学研究・教育情報センター

情報センター二年目を迎えて

高鳥正夫

(研究・教育情報センター所長)
兼 三田情報センター所長
兼 図書館(三田)館長



七年の歳月と義塾の総力をあげて作成した慶応義塾大学研究・教育情報センター計画に基いて、

昨年4月に発足した情報センターも、ここに二年目を迎えることとなった。また、地区センターのうち、最初に発足した三田情報センターが、慶応義塾図書館と三田の学部研究室との有機的な一体化を目標に、職員の再配置を行い、図書、資料に関する緊密な連繋を実現するため活動を開始してから一年を経過した。

われわれは情報センター計画にそってこれを具体化していく立場にあるが、計画の作成段階におけるとは異なって、具体的にこれを実現していく場合には、失敗と後退とが許されないだけに、情報センター関係者にとっては慎重さと勇気が求められた一年でもあった。これまで新しい仕事に努力されてきた情報センター職員に心から感謝している。

三田情報センターの一年間

昨年度において三田情報センターが立案し実行してきた諸問題は、(1)図書・資料の計画的な収集、(2)閲覧、情報サービスの向上、(3)収書、整理業務の改善、(4)その他の問題に大別することができる。

(1) 図書・資料の計画的な収集

三田情報センターのうちには、図書館と学部研究室という二つの特色ある機能単位があるが、その間における資料収集上の連絡は必ずしも十分でなかった。われわれはこれらの機能単位間における資料収集上の一体化こそ、義塾における研究・

教育体制を支援する情報センター活動の根幹をなすものと考えた。そこで情報センター発足に当たって、資料収集に関する連絡調整を密にするため専任の収書担当者を置き、三年間をかけてまずその調整を実行することとした。新年度は文学部関係の主題を中心に調整を行い、必要な図書・資料200万円以上を購入した。

各学部図書委員会と情報センターの間では、これまでも資料収集方針に関する数回の打合せを行い、その協力体制も次第に強固なものとなってきた。こうした情勢の上に、約1000万円にのぼる英国議会資料(Blue Books)の購入計画をたて、図書館、各学部および小泉基金などの協力のもとに文部省の研究設備助成金を申請したところ幸い認可され、他大学にさががけて貴重な根本資料を所蔵することができた。

学習用基本図書についても、従来、指定図書および開架図書として収集が行われてきたが、収集の範囲を学習用コレクションとして系統的に拡大すると共に、冊数も3万冊程度を目標に次第に充実する計画をたてた。そして教員の推薦のほか情報サービス担当者の協力をえて、約1100冊を新たに購入した。

(2) 閲覧、情報サービスの向上

情報センターは優れた図書・資料の収集に努める一方、研究者や学生がこれらを十分に利用できるような体制を整えなければならない。そこで、従来図書館、研究室に分れていた閲覧、雑誌、レファレンス・サービスの各担当者をパブリック・サービス部として集約し、閲覧、情報サービスの向上をはかることとした。

まず研究室書庫棟に関しては、各学部の理解と

協力のもとに、大学院修士および博士課程の学生諸君も書庫棟に入庫し、閲覧、貸出の便宜を受けうることとなった。図書館についても利用度の高い新聞、雑誌のバックナンバー、判例集などを安全開架式に改めたが、その後の調査によると、各学部学会誌を中心に盛んに利用されてきている。また、情報サービスを拡充して研究室書庫棟にも担当者を配置し、更に研究者の要望に応じて、「経済学関係記念論文集記事索引」などの文献シリーズを11号まで発行してきた。

これらの経験を基礎に、更に需要が増大してきた情報サービスの向上をはかると共に、学生諸君の利用上の便宜を促進するため、レファレンス・ルームの拡張と安全開架式書庫の拡大を計画し、ほぼ準備を完了している。これらの措置が学生諸君の学問的関心の高揚に役立てば幸いである（その詳細については、安西都夫「学生の図書館利用の一断面」p. 4）。

(3) 収書、整理業務の改善

三田情報センターの発足に際して、収書、整理業務の円滑化をはかるため、これをテクニカル・サービス部に統合すると共に、作業マニュアルを作成した。従来、購入見込の図書・資料は図書館、各学部研究室にそれぞれ持込まれていたが、昨年四月からは情報センター収書課がこれを一括して受入れることとした。この試みは初年度においてもかなりの効果をあげてきたが、今後も工夫を加えて、計画的な収書に役立たせたいと考えている。

収書課に持込まれた図書・資料は各学部図書委員会、図書館選定委員会によって選定された後、和漢書も洋書もすべて整理課で整理されることとなる。この整理業務のうち、和書の目録カード作成に当って、国会図書館の印刷カードを利用する整理方式も採用した。これによって整理業務の一部は簡易化されたが、同様の狙いをもって、洋書についても部分的に米国議会図書館の印刷カードを導入している。

これらの印刷カードの採用、図書館、研究所所蔵の洋書合同目録の編成、並びに、分類体系の再検討などを含む図書検索手段の確立は、情報セン

ター活動に重大な影響をもつことはいうまでもない。そのため、われわれは今後もこの地味ではあるが重要な業務の達成に努力していきたい。

(4) その他の問題

図書館、各学部研究室はそれぞれ収書方針に対応する予算の項目区分をもっており、また、教員の研究費である特別図書予算にも個人別の口座が設けられている。そこで三田情報センターでは、この400を越える予算項目を迅速かつ正確に管理するため、発足直後からコンピューターによる予算管理を実施している。

情報センターの日常業務のうちには、これ以外にもコンピューターの利用に適するものも存在している。そこで、各地区図書館の協力をえて機械化の研究グループを設けているが、このグループに対して、最近、日本経営情報開発協会から研究奨励金が交付された。

本塾の所蔵する貴重な資料を展示することは、これまでも図書館において行われていたが、三田情報センター発足を契機に、定期的にその展示を行うこととした。昨年は五月の江戸市民生活展を皮切りに、三田文学、三田評論など関係者の協力をえて、五回にわたって原資料を教職員、学生に公開することができた。

本年度の主な実施計画

われわれが地区センターのうち、まず三田情報センターの確立に着手したのは、情報センター計画の立案当初から予定されたことであった。それは三田地区のもつ重要性に注目したためでもあるが、同時に、他の地区センターにはそれぞれ特殊な事情があり、それに応ずる準備が必要であったためでもある。そこで、情報センター二年目の実施計画のうち主なものは、三田以外の地区センターの発足の問題である。

(1) 医学情報センターの発足

昨年度後半から準備を進めてきた医学情報センターは、必要な手続を完了して、本年四月から発足することとなった。従来、北里記念医学図書館においては医学図書館協会の活動や Medlars に代表される文献情報交換など国内および国際的な

協力もすでに行われていた。また、情報サービスについても幅広い需要者層を対象に活発に行われ、機能的な面では高く評価されていた。従って今回の医学情報センターの発足も、その実態に必要な形式を具備したものであるということもできよう。

今後の問題は、医学情報センターとして国内および国外のネットワークに参加するための資金と人材とを、どのようにして確保し維持していくかという点にある。いいかえれば、三田、日吉の場合とは大きく事情が異なる医学情報センターが、義塾の研究、教育体制のなかでいかなる地位を占めるべきかという点を、慎重に考慮する段階が近づいているようである。

(2) 日吉情報センター、理工学情報センターの発足の準備

日吉情報センターの中心をなすものは、日吉研究室と藤山記念日吉図書館であるが、前者は学部別というよりは部門別に研究者が組織されており、後者については学習図書館としての性格が濃い。更に、研究室と図書館とが場所的にも離れているなど、三田情報センターの場合とはその条件を異にしている。そこで、本年四月から日吉情報センター準備委員会を設けて、発足の準備に入りたいと考えている。

次に、工学部の日吉矢上台への移転工事は着々と進行しており、松下電気産業株式会社の好意による図書館棟は九月末までに完成の予定である。工学図書館の日吉移転に伴って、利用サービス面での拡充が計画されており、やがては医学情報セ

ンターにおけると同様に、その活動が広範囲に及ぶことも予想される。そうした事態にいかに対応するかという課題をひかえて、本年度は理工学情報センター発足の準備にとりかかる予定である。

おわりに

大学がその崇高な使命をかかげながら、実は最も無計画であり明確な見通しも持っていないとか、計画案はあってもそれがなかなか実現しないという世間の声も聞えてくる。けれども慶応義塾においては、管理組織の変更のような華々しさはないとしても、大学における研究と教育を補助または支援する図書館、研究室の再編成を目指して、優れた計画に基づいて着実な前進が行われている。

情報センターは直接の準備段階に入ってから的一年間を加えると、丁度これで二年間を経過したことにもなる。われわれはこの間の経験からいって、今後の情報センター活動は、義塾における研究、教育に更に密着して進めていきたいと考えている。たとえば三田情報センターにおける取書計画や情報サービスも、研究者が何を研究し、いかなるサービスを求めているかを熟知した上で、初めてそれに応える活動が可能となるからである。

その意味においても、われわれは情報センター活動に対する教職員、学生諸君の理解と協力を今後もえたいし、それによって情報センター計画を完全に実現できると確信している。

(46年4月10日記)

ニ ュ

《医学情報センター》

☆医学情報センターの発足

医学情報センターは本年4月1日をもって正式に発足し、従来の北里記念医学図書館の業務を全面的に継承した。また、発足と同時に医学情報センター協議会が設置され、活動を開始した(P.31参照)。なお、医学情報センター所長には外山敏夫君(医学部教授)が任命される。

☆個人別コンテンツ・サービス

従来のコンテンツ・サービスは利用頻度の高い所蔵雑誌180誌を対象として月3回発行(有料)するもの

ー ス

であったが、昨年からはそれと平行して個人別のサービス(有料)を開始した。これは各個人の必要な雑誌を登録しておき、その雑誌が受入れられると即日を目次部分を複写して利用者へ送るといったもの。現在申込者34件、延対象誌763誌である。

☆公害関連業務の増大

米国大気汚染技術情報センターに対して日本の関連文献を探索し、抄録を作り、翻訳して提供するという活動が、軌道に乗りはじめた。近年は公害全般にわたって内外の関心が高まりつつあり、当センターもこれに対処するべく公害グループを形成していくつもりである。



学生の図書館利用の一断面

— 図書館(三田)における学部学生利用の調査を中心に —

安西 郁夫

(三田情報センター
パブリック・サービス部長代理
兼 同 閲覧課長)

1969年がゲバルトに明けゲバルトに暮れたのにひきかえ、1970年の三田キャンパスはほぼ平穏であったといえよう。時おり中庭で開かれるヘルメット集会を取り巻く学生の数は次第に減り、赤煉瓦の図書館で静かに勉強する学生が漸増し、休暇シーズンを除けば、連日満員の盛況が続いた。

1970年4月、三田情報センターの発足と同時に、パブリック・サービス部の責任者として赴任した筆者は、情報センターにふさわしいライブラリー・サービスを計画するのに必要な統計的データをあれこれと集めてみた。この拙稿は、手許のデータを通じて見た学生の図書館利用の一断面を描いたらのである。

昨年の4月から受付での入館証交付を廃止し、利用者は学生証または入庫券を提示するだけで入館する方式が採用された。従って、入館者数に関する記録はない。これについては、サンプリング調査を実施したいと考えていたが、70年度中には遂に実現しなかった。筆者は1日の入館者数を平均千数百名と推定している。

三田には文・経・法・商の4学部が存在するが、図書館を最もよく利用するのはいずれの学部の学生であろうか？ この興味ある疑問に答えるために、筆者は70年の10月12日(月)から10月17日(土)までの1週間を選び、図書館内で閲覧された図書と雑誌について、ささやかな調査を試みた。

図書館の2階に開架室というものがあり、1万2千冊という小コレクションでありながら、学習用図書を主体とし、かつまた接架方式を採っているため利用がさかんであり、図書利用全体の約35

%をカバーしていた。このコレクションとレファレンス・コレクションは共にオープン制なので、前記調査の対象からは除外した。調査の対象は出納方式によって利用された閉架図書に限られているので、利用実数は不明であり、これも調査対象から除外した。

調査期間中に閉架図書を利用した学生数は、文学部420名、法学部211名、経済学部185名、商学部68名である。

学部を無視して学年別に見ると、1年1名、2年87名、3年291名、4年505名という数字になり、高学年ほど利用者が多い。

性別で区分すると、男子555名に対して、女子は329名である。

学部、学年、性の組み合わせで上位10位までを列挙すると、文4女(189)、経4男(97)、法4男(90)、文4男(75)、法3男(73)、経3男(71)、文3女(55)、文2男(46)、商3男(43)、文3男(27)、文2女(27)の順になる。

図1は前記の数字をグラフ化したものであるが、文学部、特にその女子学生の利用が顕著である。

雑誌の利用について見ると、様相は一変する。学部別では、法学部が215名でトップに立ち、経済学部が121名でこれに次ぎ、文学部は70名、商学部は51名となり、図書の場合は大きな違いを見せている。

学年別では、1年1名、2年7名、3年143名、4年300名で、高学年ほど利用が多い点は図書と同じである。

表1は、学部、性の組み合わせによる図書と雑誌の利用率を示すものであるが、表中の数字は、利用者数を在籍者数（70年10月1日現在）で割り、100を掛けたものである。

表1 学部・性別利用率

図		書	雑 誌		
経	女	19.0	法	女	17.4
文	女	17.9	法	男	5.4
法	女	16.9	経	男	4.7
文	男	12.5	経	女	3.8
経	男	6.8	文	女	2.8
法	男	5.0	商	男	2.0
商	男	2.7	商	女	1.8
商	女	1.8	文	男	1.6
全	女	16.9	全	女	4.4
全	男	5.8	全	男	3.8
全		7.7	全		3.9

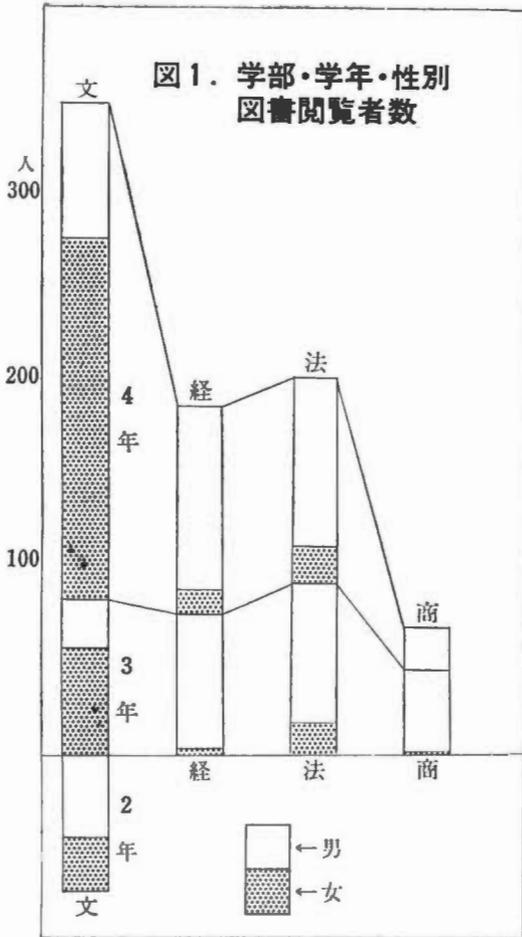
この表で明らかなように、女子学生が一般に勉強家であることは確かなようである。雑誌の場合法学部の利用率が高いことは、最もよく利用される雑誌が「ジュリスト」であることによって裏付けられよう。

70年度1年間に図書の館外貸出を受けた学部学生は、延10,469名に達する。

この数字は、三田在籍の学部学生数にはほぼ等しいから、学部学生は、平均年に1回図書を館外に借り出したことになる。この数は、決して多いとはいえない。我々としては、その原因をさぐってみる必要がある。

学部学生に対する館外貸出は、1冊1週間である。70年6月に実施された大学図書館貸出実態調査（図書館雑誌 vol. 64, p. 585-7）によれば、回答121館の60.3%が貸出期間を1週間と定めている。ところが、冊数に関しては、2冊（47.9%）、3冊（30.6%）という数字が示されており、冊数を1冊に制限している館は、わずか7.45%にしかすぎない。我々は1日も早く貸出を1週間2冊の線に到達させなければならぬ。

図書館の中で最もよく利用されるのが開架室のコレクションであることは先にも触れたが、この



性別で区分すると、男子365名、女子85名となる。

学部、学年、性の組み合わせでは、法4男（112）、経4男（77）、法3男（64）、経3男（40）、文4女（37）、法4女（34）、商3男（25）、商4男（24）、文4男（12）、文3女（6）が上位10位を占めている。図書の場合優位を占めた文学部は、その座を法学部と経済学部に分けて渡している。

以上のデータは、いずれも絶対数であるが、学生数は学部によってかなり異なるので、利用率の実際を知るには、在籍者数との対比が必要である。

コレクションは利用が競合するため“禁帯”扱いにされていた。借出の need が、最も強いと考えられる図書が貸出の対象から除外されていたわけである。三田情報センターの発足後間もなく、このコレクションの充実強化が収書基本方針の一つとして採りあげられ、プロジェクト・チームが編成されて、その選択、収集、整理に当たった。

とはいえ、たかだか1万数千冊の開架図書の補強が根本的な解決をもたらすとは到底考えられない。「利用される図書館」を実現するには、思い切った体質改善が必要である。

慎重な調査とプランニングを経て、三田情報センターは、本年3月に改善策を実行に移した。すなわち、書庫内の図書を全面的に入れ替え、利用度の高い図書約18万冊を第3書庫の1層・2層に

集中配架し、この部分を開架式に切り換えた。これに伴い、2階の閲覧事務室を1階に移すと同時に、狭いスペースに悩んでいたレファレンス・ルームは、その間仕切り壁を取り払い、2階のフロア全部を使用することになった。この結果、新館（第3書庫）の地上部分は、3階の雑誌室を含め、すべてオープンシステムで運用されることになった。

新体制によるサービスは、4月12日に開始した。1週間を経たにすぎない現時点では、利用者は新しいシステムに不馴れであり、戸惑いが感じられるが、図書館が真に「利用される図書館」の軌道に乗るのは、それほど遠い先ではなさそうである。

(46年4月20日記)

ニ ュ ー ス

〈三田情報センター〉

☆学部・図書館間における収書計画上の調整

従来は皆無にひとしかった学部・図書館間における資料収集上の連絡を密にし、両者の調整を計った上、予算の効果的使用を高め、良質の資料の必要に応じた分担収蔵の可能性をももたすべく、専任の担当者を置いて活動を開始した。具体的には、各学部の収書計画、収書方針の実情と収書に関する意見を求め図書館の蔵書及び収書計画への要望等を聴取している。

なお、これに伴ない、初年度は文学部関係の主題を中心として必要不可欠と思われるもの200万円以上を購入した。

経・商・法各学部についても年次計画のもとに実施してゆく方針である。

☆図書館における大規模な開架方式の実施

図書館側の閲覧サービス改善のため、三田情報センターでは去る3月に書庫および事務室の大巾な移動を行ない、利用度の高い図書約18万冊を第3書庫(新館)1, 2階に集中配架し、この部分を開架式に切り換えた。これにより、本年4月より、開架図書を利用する場合(図書館図書を利用する学部学生の90%以上がこのケースにあてはまる)には、玄関受付協から閲覧手続用カウンターおよびロッカーを経由して開架書庫へ

入り、自由に図書を選択し閲覧もしくは借出すことができる。これに伴い、レファレンスルームも改造し新館2階全床を使用しサービスの拡大を計っている。

☆OECD出版物の寄託

外務省経済局国際機関第二課の斡旋により、OECDから本塾へOECD出版物(昭和45年11月以降のもの)が寄託されることになり、第一便は既に到着した。これらの出版物は三田情報センターに保管され、図書館側雑誌室において利用に供せられる。

☆大学院博士・修士論文の移管

博士・修士論文はこれまで教務部に保管されていたが、三田情報センターでは工・医を除く各研究科の論文を引きとり、研究室書庫B2階に収納した。

現在は整理手続も終了し既に閲覧に供せられている

☆展覧会

新律綱領発布100年記念展	10月14日～17日
三田文学創刊60周年記念展	11月10日～13日
斯道文庫創立10周年記念善本展	12月1日～4日
三田評論創刊700号記念展	1月19日～22日
三田移転100年記念明治初期慶応義塾資料展	4月20日～22日
慶応義塾所蔵中世古文書展	5月26日～29日

文部省科学研究費補助金

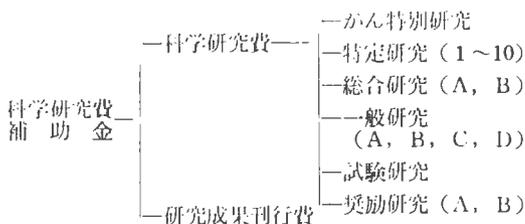
— 公募から配分決定まで —

1 補助金の種類と内容

文部省の科学研究費補助金は、研究者もしくは研究グループから申請のあった研究テーマと内容について審査のうえ、学術的に重要なものを取りあげて研究費を配分するもので、その対象はほぼすべての学問領域にわたっている。

以下、昭和46年度の公募要領にもとづいて、種類と内容について述べよう。

1. 種類と構成



2. 内容

○がん特別研究

医学的研究はもとより、生物学、生化学、微生物学、薬学等関連諸領域の研究を総合して行なうがんの本態の究明を主とし、さらにその治療、予防を目標とする研究をも対象とする。

○特定研究

学術的または社会的要請の観点から、毎年特定の研究領域を指定し、該当する領域内の研究テーマに対して審査のうえ助成するもので、本

年度の指定領域はつぎのとおりである。

- (1) 災害科学
- (2) 生物物理
- (3) 極低温における物性
- (4) 脳障害
- (5) 産業構造の変革とそれに伴う諸問題
- (6) 水資源
- (7) 情報処理に関する基礎的研究
- (8) 科学教育（教育工学を含む）
- (9) 生物環境制御
- (10) 人間の生存と自然環境に関する基礎的研究

○総合研究

総合研究 (A)

異なる機関に所属する研究者が共同して、緊密な連絡のもとに焦点のしぼられた具体的な研究課題の研究を行なうものを対象とする

総合研究 (B)

異なる機関に所属する研究者間の研究連絡を主目的とするものである。

○一般研究

同一の研究機関に所属する研究者が個人で行なう研究または数人で共同して行なう研究であって、特色ある研究を格段に発展させるためのものを対象とする。

一研究課題に対する要求額（2年または3年にわたって継続するものについてはその継続分を含む総額）の多寡による次の4種類(A~D)とする。

一般研究 (A)	1,000万円～2,500万円
一般研究 (B)	300万円～ 999万円
一般研究 (C)	100万円～ 299万円
一般研究 (D)	100万円未満

○試験研究

重要な応用的研究のうち基礎的段階のもので、成果が実用に移される可能性をもつ研究を対象とする。とくに新材料、新製法等の開発に関する基礎的研究、性能の高い研究用機器の試作研究あるいは社会的実際問題の解決に役立つ実証的研究に重点をおく。

○奨励研究

奨励研究 (A)

研究歴の若い研究者が個人で行なう研究であって、将来の発展が期待できるすぐれた着想をもつ研究を対象とする。研究歴の若い研究者とは、たとえば学位取得後5年以内または大学学部卒業後10年以内のものをいう。

なお、奨励研究 (B) は小・中・高校の教職員および民間研究者の行なう研究を対象とするもので、これは別に公募する。

○研究成果刊行費

学術的価値が高いが市販性に乏しいため刊行が困難な研究成果および学術資料の刊行を援助するもので、対象は次の三種類とする。

(1) 学術定期刊行物

わが国の代表的な学会等が、国際学術交流に資するため定期的に刊行する、次に掲げる学術誌：

(a) 欧文誌

(b) 次の条件を満たす和文誌

- 1) 欧文抄録を有すること
- 2) 発行学会の会費が年額 800 円以上であること
- 3) 年 4 回以上発行していること (自然科学関係のみ)

(2) 学術図書

個人または学会等が、個人または共同による研究の成果を発表するために刊行する図書。

(3) 二次刊行物

個人または学会等が、学術研究の基礎資料として刊行する抄録誌、索引誌、文献目録、総合目録等の二次刊行物。

なお、上記のうち次のものについては、研究計画の遂行上、同一課題を次年度以降も継続して研究する必要性が認められる場合には、それぞれの年限の範囲内で研究費の交付が予定される。

- ① 2 年を限度とするもの……特定研究 (4～7)、試験研究
- ② 3 年を限度とするもの……がん特別研究、特定研究 (8～10)、総合研究 (A)、一般研究

3. 申請の方法

補助金交付年度の前年12月の一定期間内に、所定の計画調書その他の必要書類を添えて申請することとなる。しかし実際には、義塾として、庶務課でとりまとめて申請する都合上、塾内での提出期限を多少早めに設定する。なお、くわしくは毎年10月～11月頃の塾報に公示される。

Ⅱ 審査のしくみと配分基準

1. 配分審査の組織

補助金配分のための調査審議は、学術審議会の科学研究費分科会において行なわれるが、実際には補助金の種類に応じて「がん特別研究」、「特定研究」、「一般研究等」、「成果刊行」のそれぞれの審査会が分担する。

このうち特定研究審査会については、毎年設定される研究領域別の小委員会により、また、成果刊行審議会においても、学問の系統による7小委員会によって、それぞれ実質審議が行なわれた (昭和45年度)。

一般研究等審査会は「総合研究」「一般研究」「試験研究」および「奨励研究(A)」を審査対象とし、二段審査方式をとる (昭和45年度は509名の委員によって第一段の書面審査を行ない、90名の委員によって第二段の会議審査が行なわれた)。一般研究等審議会はさらに二つの系列による次の12の小委員会にわかれて、専門領域毎に実質審議が行なわれることとなっている。

第一系列……一般研究 (C・D)、専門分野にまたがるものを除く総合研究 (A)、試験研究、奨励研究 (A) を担当するもの

文学、法学、経済学、理学、工学、農学、医学、家政学、体育学等の8小委員会

第二系列……一般研究 (A・B)、専門分野にまたがる総合研究 (A)、総合研究 (B) を担当するもの

人文系、物理系、化学系、生物系の4小委員会

2. 配分審査の基準

学術審議会は審査にあたっての基本方針を定め

るが、昭和45年度の場合、その主なものは次のとおりであった。

- (1) 各種目の目的・性格に即し、かつ、学術的に重要なものを選定する。
 - (2) 採択課題には、その内容に対応する必要額を配分するよう配慮する。
 - (3) 次年度以降の継続を認める種目については、継続分との調和のとれた採択計画をたてる。
 - (4) 二段審査にかかる種目について、各専門分野への研究費配分方式は、前年度配分額と本年度における申請状況（金額・課題数）を要素として定める。
- また、一般研究等審査会の二段審査方式は、第

一段の書面審査の結果が評点の形で示され、第二段審査の基礎資料となるが、その際、評点の要素としてとりあげられたものは次のとおりであった。

目的の明確さ、計画の妥当性、学界への貢献度、獨創性、研究遂行の能力、申請研究費の合理性、申請機器の必要性、研究組織の有機的協力の可能性

Ⅲ 配分結果について

昭和45年度の配分結果の概況は第一表のとおりである。また、同年度の義塾関係者の申請と採択の状況を第二表に掲げた。

〔第一表〕 昭和45年度科学研究費補助金配分結果

(金額単位：千円)

事 項	研究課題数			研究経費			採択1件当たり配分額		
	申請	採 択	採択率	採択の申請額	配 分 額	充足率	平 均	最 高	最 低
がん特別研究	344	137	39.8%	814,000	468,000	57.5%	3,416	14,500	740
特定研究	836	390	46.7	1,609,719	963,480	59.9	2,470	11,900	450
総合研究	905	492	54.4	1,775,967	891,130	50.2	1,811	5,000	250
(A)	812	439	54.1	1,651,910	841,730	51.0	1,917	5,000	250
(B)	93	53	57.0	124,057	49,400	39.8	932	1,900	500
一般研究	11,473	2,565	22.4	5,223,672	3,764,200	72.1	1,468	24,950	70
(A)	596	196	32.9	1,808,119	1,525,540	84.3	7,783	24,950	200
(B)	1,381	417	30.2	1,555,494	1,229,780	79.1	2,949	8,870	200
(C)	5,123	1,069	20.9	1,418,719	791,610	55.8	741	2,400	100
(D)	4,373	883	20.2	441,340	217,270	49.2	246	600	70
奨励研究(A)	4,453	1,027	23.1	470,413	196,120	41.7	191	500	70
試験研究	1,541	564	36.6	1,079,497	540,120	50.0	958	2,500	200
研究成果刊行費	418	290	69.3	245,181	138,000	56.2	475	2,000	100

(学術月報 '70年10月号より)

〔第二表〕

昭和45年度義塾関係者の申請・採択状況一覧

事 項	申 請 件 数							採 択 件 数								
	文	経	法	商	医	工	研	計	文	経	法	商	医	工	研	計
がん特別研究					7			7					2			2
特定研究		1			9	6	2	18		1			5	2	1	9
災害科学								0								0
生物物理					4			4					2			2
極低温における物性								0								0
脳障害					5			5					3			3
産業構造変革		1					※1	1		1					※1	1
量子エレクトロニクス								1						1		1
水資源								0								0
科学教育								3						1		1
情報処								2	※2	1						0
総合研究	3	1	1	1	6	4		16	1	1			3	4		9
(A)	3	1	1	1	5	3		14	1	1			2	3		7
(B)					1	1		2					1	1		2
一般研究	3	7	1	1	71	34	1	118	2	5		1	9	7		24
(A)					1	2		3								0
(B)				1	15	7		23				1	1	1		3
(C)	2	2			42	16		62	1	2			6	5		14
(D)	1	5	1		13	9	※3	1	30	1	3		2	1		7
奨励研究(A)					51	15		66					8	2		10
試験研究					8	2		10					2			2
研究成果刊行費								0								0
合 計	6	9	2	2	152	61	3	235	3	7	0	1	29	15	1	56

※1. 産業研究所 ※2. 情報科学研究所 ※3. 体育研究所

注1. 本稿は下記の資料をもとに研究・教育情報センター本部事務室でまとめたものである。

- ・昭和46年度科学研究費補助金公募要領(文部省大学学術局)
- ・「昭和45年度科学研究費補助金の配分結果について」(学術月報1970年10月)
- ・文書部庶務課保管の資料

2. 塾内の科学研究費補助金関係事務は、塾

監局文書部庶務課、医学部教務課および工学部庶務課で取扱っている。また、公募についての直接の問合せ先は、下記のとおりである。

- ・科学研究費……文部省大学学術局研究助成課
- ・研究成果刊行費……文部省大学学術局情報図書館課

ゾーフ部屋の流れ

伊東弥之助

(三田情報センター)
テクニカル・サービス部長

慶応義塾図書館史はまだ経ったものはないが、現在の図書館が出来たときに祝詞やら演説やらで回顧しているものがいくつかある。それによると時の塾長鎌田栄吉は明治23年慶応義塾が大学部を開設したとき、今迄の蔵書に加えて、新たに文学、法律、政治経済の書籍を外国に求めて基礎を定めたと、これは明治42年11月23日、建物の安礎式の式辞として述べている。これは大学図書館としての起源であろう。式辞にもあるように、是迄の図書に加えてとある図書は、では図書館の蔵書とはいえないのか。明治23年、小泉信吉を迎えて新塾長とし、文学、理財、法律の三科を設けて私立最初の大学として発足した以前の慶応義塾は、安政4年福沢諭吉が私塾を創設して以来、洋学中心の学校であった。そしてその洋学塾には図書室は欠かせないものであった。明治45年5月18日新図書館建設の開館式当日、福沢諭吉の長男一郎は亡父の回想をして緒方塾のゾーフ部屋のことを語っている。「私の父が能く生前に話したことがある。父がずっと古い時分には緒方先生の塾に書生をして居った。其時の有様は蘭書の印刷したものは余りない。偶々其印刷した本が1冊あればそれを皆んなで引写しをして、それを会読の時に使って居ると云うことであった。それからなおゾーフという字引が緒方の塾に一つしかない。それで皆んなゾーフのある部屋に行って其字引の周囲に集って首っぴきで字引を見て勉強する。その部屋のことをゾーフ部屋といったそうで、それは自伝にも出て居りますが、其時の父が今なお若しも存生であって、此図書館を見たならば、大なる相違であると思って驚くことであろう」と述べ、次

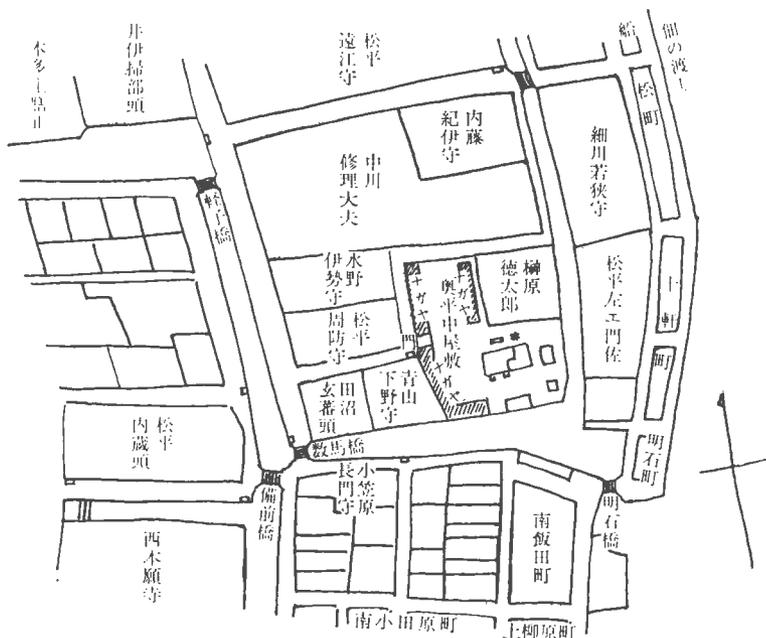
で新銭座から三田への変遷を語っている。大学図書館という字に拘泥するならば鎌田塾長のいう明治23年を創始とせねばならないが、慶応義塾の歴史からいえば創立当初からの図書室を考えなければならぬ。

緒方塾のゾーフ部屋の有様については、福沢諭吉や長与専斎らが詳しく語っている。それ程、蘭学塾には必要かくべからざる部屋であった。何故ならゾーフという字書は自伝にもいわれているように、蘭学社会唯一の宝書とあがめられてるものであり、誰しもが持てるものではなかった。江戸幕府の開成所などには数部も取揃えてあったことであろうが、民間人ではその名も高い緒方洪庵でさえ、一部しか持てない。学生各々が持てる道理がない高価なものであったから、この部屋の実在は蘭学塾のそれこそ心臓の部屋であったといえる。

さて、安政5年10月、福沢は江戸へ出て、鉄砲洲の奥平中屋敷の中で蘭学を教えた。そこにはゾーフが備えられていたであろうか。ゾーフの字書も安政4年に幕府の奥医桂川甫周の翻刻するところとなった。桂川版は全16冊、積んで高さ2尺に余る大部のものである。従って以前の写本時代に比べれば安価であったろうが、まだ貧乏であった福沢塾に備えられたかどうか、おぼつかない。創始の頃の福沢塾は「慶応義塾百年史」によれば、藩の紐つきの学校であったという。その典拠を福沢自身が書いた明治16年版「慶応義塾紀事」に「僅かに一小家塾」と記したことに基いている。編者は家塾を江戸時代の通念にしたがうと、私塾と藩学との中間に位し、「家塾」は幕藩に仕えて

いる学者が幕藩の意をうけて自宅に設けた塾であると説明している。若し藩命により藩の保護が多少なりと得られたならば、当然そこには蘭学塾必須のゾーフは備えられていたことであろうが、しかし当初の福沢塾の様子は誠に見ずばらしい。安政6年入門して、後に陸軍軍医総監となった足立寛の懐旧談によると「私が十八の年に福沢先生が其前年大阪の緒方塾より江戸に出て参られたという評判を聞いて、鉄砲洲の住宅に先生を訪いました。先生は私よりも八つ年長でありますから二十六の年かと思ひます。奥平の長屋で一軒の空屋を借りて居られましたが、下は六畳一室で二階には十五畳ばかりの間がありました。(中略)下の六畳の間には畳が三畳敷いてあって、二畳の所に先生が坐って片隅の一畳に私が居りました。それで私が参りました時に『今、飯炊きも居ないから、お前は此処に来て飯でも炊いて書生をしてたらよからう』と先生がいわれるので、私は飯炊きをしながら彼の一畳の上で蘭学を研究したのであります」六畳の間に三畳しか畳がなかったという。それは宛然足軽長屋と同様である。藩の保護があったとしたなら、もっと優遇されて然るべきであろう。奥平の中屋敷に塾を持つなどというといかにも好待遇であるように思うかも知れないが、封建時代の空気を吸った者から見ればおかしな話であったと見え、慶応義塾創立50年祭の式典で、福沢と親交の厚かった大隈重信はその頃を想像して「先刻奥平侯の藩邸などという、鎌田校長の御話であったが、話で聴くと余程立派に聞えるが、な々に勤番長屋である。借家長屋である(拍手)実に貧乏なる状態で、そんな立派なものではない。諸君が夢にも見ることは出来ぬ。之を見ようとすれば、どこか此辺の貧民窟へ行つて見ると直ぐ分る。殆ど貧民窟

の状態である。其の時分の状態なんと云うものは——。福沢と足立がいた部屋でさえ、六畳間に三畳しか畳がなかった。岡本周吉や山口良蔵らがとまったという二階に畳があったかどうか疑わしい位である。したがって百年史の「家塾」の解釈はいささか、考えすぎの感がある。第一、福沢の書いた「慶応義塾紀事」は「日本教育史資料」作成のため文部省に差出されたものの付録である。文部省は明治5年、既に家塾を定義した。「唯一家或は二家迄の子弟を教授者は家塾に属し候間、私学之数に算入せず」と私塾よりも小さいものと云い、それに基づいて福沢は「私学明細表」を提出した。「教育史資料」のときも、注意書に「家塾寺子屋を開設するものは奉行郡宰里正等の許可を受けしや」などの項があって、百年史の編者のように当然藩命によるものであるとしたなら、この注意はおかしなものといわざるを得ない。明治初年、文部省は竹橋にあれど、文部卿は三田にありといわれた位の福沢が、文部省の定義を知らず、質問に見当違いの答をするとは考えられない。



鉄砲洲奥平中屋敷とその周辺。中屋敷内の建物配置は學生小川駒橋の記憶に基づく。安政の開塾当時は斜線の長屋の一隅で、文久以後は建物の白い部分が塾舎であった。原図は文久版江戸切絵図による

こうした塾へ「藩中の子弟が三人五人づつ学びに来るようになり、又他から五、六人も来るものが出来」たというが、おそらく極く初歩の者で、和蘭の文典を笈作阮甫が江戸で翻刻したガラマチカやセインタキスを素読したり、講釈するくらいで済んだのであろう。ところが、それから一歩進むには原書を持たねばならない。緒方塾には蘭書が十部たらず備付けてあったというが、福沢はどうであったろう。福沢が江戸へ出て来たときは公用の勤番であるから、道中ならびに在勤中の家来をひとりくれる定則から、家来一人分の金が渡されるが、その金で家来を雇わず、江戸へ行ったがっていた岡本周吉に呉れてやったので、荷物は何もない。僅かにベルの築城書の原書の写しと自身の翻訳原稿を懐中に入れて来ただけである。福沢と岡本が江戸へ来て、汐留の奥平上屋敷の門を叩いて来意をつけると、門番は着のみ着のままのような風体を怪しんだと伝えられている。この福沢が鉄砲洲の勤番長屋をあてがわれて、江戸扶持として六人扶持が本来の十三石の外に下附された。十三石は中津にいる母や姪の生活費で、六人扶持が江戸にいる福沢の給金だとするとなかなか原書は買えない。さきのベルの原書の所持者は家老の奥平老枝で23両で買った。大阪にいるとき洪庵が黒田の殿様から借りて来たワンダーベルトの物理書は30両という。蘭書の稀覯さ加減といったら、こんなものである。六人扶持で、教授の謝礼や写本の礼金位の収入は多少あったとしても、蘭書の所持は思いもよらない。というようなわけで、初期鉄砲洲の塾は原書もなければ、ことさらゾーフ部屋と名付けるような場所もない極小私塾であったと想像される。

安政6年、開港場になったばかりの横浜へ行って、蘭語が少しも通用しないことを知って、すぐ英語の学習に志し、通辞森山多吉郎のところへ通ったり、翌万延1年には幕臣木村喜毅の従僕となって米国へ渡ったり、帰国後は幕府の外国方の翻訳官に雇われたりして、英語の上達に努めたのは福沢らしい機敏な行動であったが、それも藩の紐つきなどという窮屈さがなかったから出来たことであろう。そして幕臣となったためか、或は上士

の娘を嫁にする必要からか理由は判明しないが、奥平の中屋敷を離れて、芝新銭座に新居を構えた。その家は上下合せて二十畳ほどで、大いさは鉄砲洲の長屋とさして変らなかったが、庭に松の大樹があり、下女一人を雇えたから、生活は向上していた。この時代も外国方の事務の余暇英語を子弟に教えていたが、部屋の真中にわさびおろしが紐でつるしてある。それは書生が使う度になくなすからという理由で、なお殺風景な微々たる塾であることに変わりなかった。しかしこの頃の福沢は多少洋書を所蔵していた。

先づ、福沢が横浜で蘭語に失望したその日、キニツフルという独乙人が僅かに蘭語を話せた。福沢はその店で薄い蘭英会話書2冊を買って来た。またその後、横浜へ行く商人から英蘭対訳発音付辞書1部2冊を5両で、藩に嘆願して買って貰った。それはジョン・ホルトロップの著せるもので、蘭語から英語へ移る人にとって非常に便利であったから、其後多くの人に愛用された書物である。英語が目に見えて増加したのは2度の洋行の後のことであろう。万延1年渡米の際は自費の洋行であったから、図書を多くは持ち帰れなかったが、自伝によるとウェブスターの辞書を買って「其悦は天地無上の宝を得たるが如く」であったという。このウェブスターは大辞書でなく抄略版であった由である。この外に「数冊の書を携えて帰国」したと後年回想しているが、その書名はわかっていない。

文久2年条約改訂のための幕府の遣欧使節に随行し得た時は、幕府から四百両の手当金と繰替拝借金を相当うけて、大いに書籍を買ってこよとの意気込みで出発した。後年の「慶応義塾紀事」によると「文久2年英国開版の物理書、地理書、学術韻府等の書に併せて経済書1冊を得たり。即ちチャンブル氏教育読本中経済の一小冊子にして当時は日本國中稀有の珍書なりき」とある。又この時、上海出版の英清辞書を買って来た。この本は現在も保存されて見ることが出来るが、その上包に「英清辞書二冊千八百六十二年竜動にて買う。価五ポンド、火災余甚だ高価なりき」と福沢の筆で記してある。火災の後であるばかりでな

く、欧羅巴は物価が高くて出発前の意気込みほど、多くの図書は持ち帰れなかったらしい。

しかしこの旅行で英語に自信が持てるようになり、その上、海外の現実を見、振り返って日本を眺めたとき、この儘ではいけないという考えが起るのを押えることが出来なかった。海外にいたとき既に日本国内の攘夷の噂を聞き、帰国した直後にも公使館の焼討ちや洋学者への暗殺の魔の手がのびているのを知りつつも、福沢は英学普及の必要を確信して、積極的に塾舎の経営にのり出した。安政5年の開塾は藩の上司に呼ばれての教授であったが、渡欧から帰っての学塾は福沢の発意によるものである。先づ入門帳を作った。塾舎も幸い、参勤交替制の緩和によって、奥平藩の藩士の多くが本国中津へ引き上げたため、屋敷に空き屋が多くなった。福沢はその空屋を借りた。前と同じ鉄砲洲の中屋敷の一隅ではあったが、この時は勤番長屋でなく「かなりの藩士の在勤せし古き長屋二軒の大小教室を使用せしもの如く見えたり」（森春吉回想）というし、立田革の懐旧では更らに詳しく「塾は東西に別れ、西は小幡塾頭、東は和田塾頭にて監督し、時々会議を催うされたり。教科書は大概、文典、地理書、窮理書、化学書等なり」と伝えている。

この時代の塾生は緒方塾のそれと同様に一冊の本を手写し、福沢の所蔵せる辞書を引いて勉強したのであろうが、それらの蔵書が塾の——平面図は小川駒橋の記憶によるものが残っている——何処にあったかわからない。ただ次のような記事が福沢の備忘録にある。「恭平取乱候処、卯四月ゾーフ巻冊、中丁岡村屋へ質入、金九両借用の由、福沢の旧書人身窮理は売払い、同断刀は弍両にて質入の由」恭平というのは姓は小幡、文久3年4月入門した古い塾生である。慶応3年福沢が再度の渡米から帰って、自分の蔵書の一部が無いのに気がついた。調べて見ると信頼していた恭平の仕業であったというのである。質入れは恐らく福沢

の留守の間に、金の算段をつけるつもりでやったのであろうが、それが失敗したと見える。ゾーフは既述した蘭語辞典、従って英学塾となった当時の福沢塾ではもうさして有用なものではなかったのかも知れない。それは兎も角、塾生の容易く手に得る場所にあったことを知り得る。

この図書部屋を充実させる目的で、慶応3年、幕府の軍艦購入使節の一員となって渡米した。この時は自費の外に仙台藩、和歌山藩からも資金を得ていた。そしてその荷物が「大小数弍拾」の箱詰となって送られて来たが、使節主席小野友五郎とトラブルがあって差押えられ、それが解除されたのは年も押つまった12月となった。その頃には鉄砲洲は外国人の居留地になることに定まっていたから、急遽立ちのかなければならなかった。そこで12月25日、維新戦争の決定的運命の日、即ち鹿児島藩邸焼打ちの黒煙のあがるのを見乍ら、かつて新婚時代を過ごした新銭座の地に新塾舎を求めたのであった。従って鉄砲洲の図書部屋を充実させようと紐育のアプレトン書林から買って来た図書は、鉄砲洲時代には間合にわなかった。

それらの図書の内容は「経済、修身、物理、化学、リーダー、地理、歴史の類一と通り備わり、ウェブスター大字典の如きも数十部もあった」と永田健助は語っている。永田は初め幕府の開成所で学んだ。開成所の「書館には随分多くの書籍が備えてあったが、最も多いのは文典であり、次いで物理書であった。政治、哲学、経済、修身などの書物は碌々見られなかった」と開成所と福沢の買った図書との比較をしている。そしてこの時は一種の書籍を20部30部づつ揃えて買って来たから教員・塾生すべてが図書室備付の原書を手にし、これまでのような謄写の労力が省かれ、辞書を使って自由に勉強することが出来るのであった。それは洋学書生にとって画期的な夢のような事柄であって、次の新銭座時代の塾舎で実行されたのである。

Q 本年4月1日付で医学図書館は“医学情報センター”と名称変更をしたが、その新体制にふさわしいサービスとしてはどんなものを考えているのですか？

A 医学図書館としての活動は、今まで文献情報を主とする資料提供、文献探索など、つまり記録され、固定化された情報のサービスが主体でした。今後は、動きつつある情報やネガティブな情報、例えば病歴、症例検討会、学内研究会の記録等、より身近な情報をも、その対象として行く方針です。

Q 具体的な方策としては？

A 現在、手始めに行っているサービスとしては、文献にまだなっていない情報たとえば学会抄録を管理して、医師・研究者への情報サービスを試み、日本神経学会の学会抄録の保管、蓄積、会員への告知、要求に応じて抄録の複写の提供という活動を実験的にを行っています。又今後、要求の増加、様々な要求に対処するため、コンピューターによる情報検索システムも考えられるでしょう。

Q 今後この様なサービスを拡大してもらえるのですか

A なにぶんこの様なサービスは財政的な支えが必要であり、今すぐ他の学会情報も提供ということは無理なので、安いコストで効率の良いシステムを指向して実験していく方針です。このためには医師自身が直接文献情報サービスの活動に参加し、その責任の一端を担い、情報内容の分析、縮小、統合等を行ない、より本質的な情報サービスが行なわれることを期待します。その手段として、研究者の個人ファイルの索引サービス等を行ない、医学情報センターと医師とのより密接な協力体制を作りあげていきたいと考えています。

Q 日吉図書館のレファレンス室は他と比べて座席数が広くとってあるようですね。

A ええ、130席あります。二階閲覧室が212席で、対象学生数に比べて座席の絶対数が足りないのに、勢い、それを補う意味で第二閲覧室的性格を強く持っています。それに、手元に百科事典とか主題別の事典など基本参考資料がありますから、学習室と申しますか、学生がグループなどで来ては気軽に授業の合間の勉強などする場所に使っています。その代り本格的な参考質問というようなものは少いです。レファレンス室の係にはライブラリー・スクール出の専任者を二人置いて、館としては一番力をそそいでいますので、もっと積極の利用を望みます。

Q 開館時間が6時迄という点について。もっと延長し

るという声もあると思いますが。

A 利用者にとっては開館時間をより長くという事は誰しも願うことでしょう。例えば、三田のように、9時まで開館するにしても、窓口業務の要員を昼と夜の2本立てにするとかの抜本的な要員体制の問題が先ずあります。しかも三田と違って草深い日吉では、たとえ数名にしても、ある程度責任をもってまかせられる夜間勤務者を確保することは非常に難しい状況にあります。かって日吉でも、少しでも、希望に沿うようにと、現在の要員体制で無理して2時間延長の8時迄開館を試みた事がありました。その結果は、6時以降になると閲覧者は急テンポに減少して、7時すぎると閲覧者はわずか2、3名、閉館間近ともなると1人か2人居るか居ないかで、その為に残っている図書館員の数の数が多いという日が続きました。都心からはなれた日吉では、三田とちがいで、利用するのはごく限られた日吉近辺に住む学生の、それも極く一部の者だけなのです。このような事で、6時閉館というのは一応妥当な線として実施しているわけです。

なお、質問と直接関係はありませんが、利用者数などの話も出たことですから、ついでに、日吉図書館の利用の実態を示す統計を掲載しておきましょう。

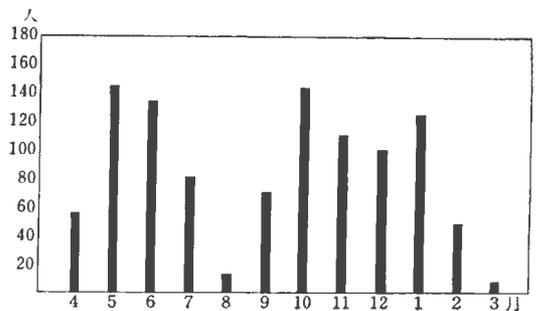
藤山記念日吉図書館 館内閲覧統計

昭45年4月～昭46年3月

1) 学部別にみた学生利用冊数(年間)

	文	経	法	商	医	工	計(冊)
図書(和)	4,119	7,618	9,860	3,995	771	5,171	31,534
〃(洋)	34	28	47	31	11	8	159
雑誌(和)	98	284	614	153	6	61	1,216
計	4,251	7,930	10,521	4,179	788	5,240	32,909
学生1人当りの利用冊数	3.79	3.02	3.08	1.70	3.39	2.94	2.83

2) 図書利用者数の一日平均(月別)





大学事務職員の未来像とライブラリアン

田 中 栄 一

(塾長室企画課係主任)

1. はじめに

事務職員とは何ぞや——義塾の諸規程集を繰っていくつかの規程から要約してみると、「義塾に勤務する職員のうち、教育職員と技術職員を除いたもの」ということになる。塾監局人事課で最近の数字を聞いてみると、技術職員を含めた非教育系職員数は1,847名である（昭和46年3月1日現在）。視野を日本全国にひろげてみよう。国公立の大学・短大・高専そして高・中・小さらに盲・聾・養護学校はては幼稚園にいたるまで、各種学校を除く全教育機関において、いわゆる学校事務（技術系を含む）に携わるものは、318,415名（内女子181,274名）にのぼる（昭和45年5月1日現在、文部省学校基本調査速報による）。これらの人々は、自己の未来をどう予測しているのであろうか。その声を余り耳にしないのは不思議なことである。これほど多数の、そしてさまざまな業務に励む事務職員の未来像を、明確かつ画一的に描きあげる自信は私にはない。ここに述べるものは、主として私立大学での仕事に生きがいを求めようとする一介の事務職員の夢である。

2. 大学の未来像

大学事務職員の未来像を描く前に、大学そのものの未来像を描いてみるのが順序であろう。大学は果たして未来に存在しうるであろうか。かつて研究と教育の独占体であった大学が、そのままの姿でこれからも存続するとはとても考えられない。現に大学の伝統的な活動は、社会の多くの他の機関によって取ってかわられ、大学はますます影の薄い存在になりつつある。たとえば、高等教育が大学だけの専売特許とする考え方は最早通用しまい。同じレベルの教育は、産業界・出版界・

放送界などでいくらかでも見受けられる。研究開発についても、企業の研究所などの方がはるかに金も使っているし完備もしている。その成果も優れたものが少なくない。しからば、大学は何によってその活路を開くのか。その答えは「外部から干渉を受けない自由な研究と教育」ということに尽きるのではなからうか。すなわち大学における研究と教育は、時の権力や財界の志向に影響されることなく、国民の真理・真実を知る権利に應えてこそ、その存在意義があると思うのである。大学の自治を守りぬく以外にわれわれの進むべき道はあるまい。

かつては大学の自治イコール教授会の自治であった。今でもその名残りは少なくないが、これも未来の大学には通じない。大学の自治を形成するものは教育職員だけではなく、事務職員も学生も含むという、時代の流れをせき止める訳にはいかないだろう。研究・教育のあり方について自由に発言しうる場が、大学の自治を形成する構成員全員に制度的に保障されるようになって、はじめて大学はその本来の姿を取りもどすといつてよからう。

ただ忘れてはならないことは、教育職員・事務職員・学生にはそれぞれ固有の立場があるということである。共に科学に奉仕するという点では三者の間で何ら相違はないが、科学への関与の仕方において、研究者と事務職員の間、教員と学生の間、それぞれ任務と能力の違いがあることは当然である。事務職員の固有の立場・固有の任務とは何か、私はその基礎を教育基本法第10条に求めたい。すなわち「教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対して直接責任を負って行なわれるべきものである。教育行政は、この自覚

のもとに、教育の目的を遂行するために必要な諸条件の整備確立を目標として行なわれなければならない」

3. 行政職員

今日、各大学の商学部や経営学部において、経営学研究の進歩は目ざましいものがある。この場合の経営学は、勿論企業経営学であって大学経営学ではない。教育学部においても、そのような研究は極めて少ない。最近、東大や広島大などで高等教育専攻課程設置の動きが見られるようであるが、現状では皆無に等しい。また大学経営に従事しようとするものの養成もほとんど行なわれていない。紺屋の白袴と非難されるゆえんである。もっとも現代の大学は、私的の利益・理由によって存在するものではなく、真理の探求、公共の利益、人類の理想を求めるとの公共機関として位置づけられる。したがって利益を第一とし、生産性を高めることを目標とする企業経営とはおのずから次元を異にすることはいうまでもない。しかしそうかといって大学経営者が不要というのではなく、現にその必要は強くさげられているし、将来もこの傾向はますます増大することが見込まれる。というのは大学が近代化し規模が増大すれば、企業経営的な管理能力者（これを企業経営者と区別する意味で以下大学行政職員とよぶことにする）に当然必要になってくるからである。

よく問われることであるが、5ケタの学生数をかかえる今日の大学は立派な都市として通用する。近代的な都市には、それに見合う都市行政と、練達した市長、そして有能な都市問題専門の行政官が必要であることは今更いうまでもない。学生数が5～6千人であった旧帝大の管理体制が慣習として根強く存続するのが、今日の大学のいつわらざる実態ではなかろうか。学部を部落とする町や村の行政で、巨大な都市の管理運営ができる筈がない。大都市で専門の行政官を養成せずに、大衆討議を延々としていては、道路一本満足に作ることはできないのではあるまいか。

将来の大学が、ますます大衆化・巨大化・多様化の道をたどり続けることは回避できないことと思

われる。大学の機能が多元化し、その機能を果たすための仕事が専門化するにつれて、有能な管理運営の専門家、すなわち大学行政職員の重要性が増大し、総合計画が欠かせないものになることは当然予想されよう。特に、法人組織としての私立大学が健全な発展を遂げるには、プランニングとマネジメントの能力をもった専門職の機能が不可欠になると考えるのである。それは法と財政の監督者にすぎなかった古い型の官僚としての行政職員でなく、プロ意識に徹した近代的な経営管理の専門家としての行政職員である。

私立大学の財政危機がさげばれている。しかし単に財政問題が片附けばこと足れりというほど今日の大学がかかえる問題は単純ではない。研究費の不足、教育の不在が指摘されているのは、税金で賄われている国立大学でも同じである。結局は真に資質のある大学教員と大学行政職員との不足ではないだろうか。とりわけ私立大学にとっては、現代における大学の理念や果たすべき役割りと使命を真に理解し、よりよき大学造りのための情熱と実力を備え、しかも私学の経営能力を備えた人間の開発こそが急務であると考えるのである。

4. 専門職員

大学の大きな欠陥の一つに長期的な計画をもたない点があげられる。そしてその長期計画を生みだす「考える組織」の欠如がしばしば指摘される。今日の有名企業が近代的産業発展時代のきびしい競争を切り抜けてこられたのは、そうした「考える組織」をもっていたからといわれる。これまで競争というものが比較的少なかった大学が、今後もぬるま湯につかりっぱなしという訳にはいかないだろう。プランニングの能力をもった専門職員の要求は日毎に強くなることが予想されるのである。

学校事務の特色の一つに「教務事務」があげられる。国立学校設置法施行規則第1条第5項に「教務職員は、教授研究の補助その他教務に関する事務に従事する」との規定が見られる。大学を構成するものは教職員と学生とカリキュラムであ

るともいわれる。教育の質の向上にあたって、カリキュラム改善は欠かすことのできないものの一つである。その場合に、必要な基礎的参考資料を提供することを任務とする専門職のサービス機能は、今後ますます強化されることが望まれるだろう。教務関係職員としてカリキュラム専門家とかガイダンス或はオリエンテーションの職員などが脚光をあびるに違いない。

わが国のように大学の数が800を越え、同世代人口の約20%も進学するようになると、個人が才能にあわせて進学先をさがすことは容易ではない。アメリカなどには、学生の個人的希望や才能に応じて、かれらを各大学に適切に配置するアドミッション・オフィサーという専門職が存在する。そしてその専門家の協力のもとに、総合試験制度も発達している。わが国でも育成をはかるべき専門職の一つといえよう。

学生の生活と密接な関係のある分野として厚生補導がある。大学設置基準にも、その第43条に「大学は、学生の厚生補導を行なうため、専任の職員を置く適当な事務組織を設けるものとする」と専門職の必要を認めている。この分野でカウンセリング活動が重要なウエイトをもつことはいうまでもない。これまで教育または研究の領域と考えられていたカウンセリング活動が、事務職員によって専門的に分担される傾向が今後ますます促進されるのではないだろうか。

未来の大学を「図書館中心の大学」と考える人がいる。すなわち教授法の改変で学習センターとしての教室がなくなり、特別閲覧室の専用ブースで、学生は各自の能力に応じ、各自のペースに従って学習を進めるという教育の個人化である。印刷物は勿論のこと各種の視聴覚装置などを用い、学生はその多くの時間をここで過ごすことになる。図書館が研究と教育のセンターになると、図書館員が教員に、そして教員が図書館員になる傾向がますます強まる。

不思議なことに、大学図書館に勤務する事務職員が専門職でなければならぬ法的根拠はどこにもない。一般図書館や高校以下の図書館については、専門的事務に従事する司書の規定が見られ

る。しかし現実には専門職をおかない大学図書館は皆無であるから、大学図書館はかくあるべしとの一般的認識にささえられているといつてよからう。

義塾に研究教育情報センターが発足してから一年を経過しようとしている。従来の受身の姿勢から積極的なサービスへと方向を転換し、全塾的な連繫をはかりつつ研究・教育により密着しようと指向する同センターへの期待は大きい。その健全な発展には、情報の収集・整備・加工・供給のために、正規の訓練をうけた専門職員の存在が欠かせないものになることはいうまでもない。

これまでいくつかの専門職をあげてみた。すなわち、行政職員；プランナー；カリキュラム専門家；ガイダンスまたはオリエンテーション職員；アドミッション・オフィサー；カウンセラー；ライブラリアン；このほか当然コンピューター技術者も忘れることはできないし、集会の専門家などというプロフェッショナルも生まれてこよう。いづれにしても、事務職員の未来像は何らかの専門人であるといつて間違いはあるまい。専門人は己れの専門に徹するとともに、他方では自分の専門が全体の中でどういう意味をもっているかということ絶えず考えられるようであれば意味がない。

5. 地位の向上

このように考えてみると、これまで学校基本法などに漠然と「事務」と規定されてきたわれわれ事務職員の仕事の形態は、今後大きく変わることが予想されるのである。すなわちこれまで事務の中心的存在であった記録的・書記的業務は次第に影が薄くなり、単純作業の多くは機械化され、そこから取り出されるデータ処理を中心とする管理事務が生ずると同時に、他方では新たな事務領域の拡大がおこって、これまで教育又は研究の領域として行なわれてきた分野までも事務職員によって専門的に処理されるという傾向がますます促進されるものと思われるのである。

そこでは、事務職員が研究・教育の協役であり、また縁の下の力持ちであるとの感覚は完全にぬぐ

い去られる。事務職員が何か卑屈な感覚をもって
いたがために、大学の運営上非常にマイナスにな
っていた点も改められることになろう。間接的
であるとはいえ、研究と教育という共同作業を行
なう一員であるとの自覚が、事務職員の中にも高
まることになろう。教員と分業の関係で対等な立
場に立つことから、おのずと事務職員の地位の向
上につながり、大学は近代的協力社会へと生まれ
かわるのである。

未来の社会においては、エリートと非エリート
というようないわば一元的な価値尺度による順位
づけは消滅するのではなかろうか。幾通りかの物
指によって、すべての人間はその所有するあらゆる
能力が適切に評価されることになり、自己の能
力に生きがいを与えられるような社会が実現する
——いやむしろわれわれの力で実現させねばなる
まい。事務職員は自信をもって専門に生きるべき
ではないだろうか。

30万人もいる事務職員の未来像は、結局は各人
の固有の立場に応じて、30万通りに描きあげられ
ることになろう。しかし、30万通りの未来像の羅
列のみでは意味がないから、可能な限り集約して
「事務職員如何に生くべきか」に対する基本的な
方向づけは必要であろう。わが国にそのような集
約の場が見られないのは残念なことである。

アメリカにおいては、学校事務職員のプロ意識
はかなり旺盛で、各種の事務職員協会で熱心な研
鑽が続けられると共に、全国的な上部団体を形成
して、その未来像を常に描きつけている。たと
えば大学の事務職員のみをとりあげても、1912年
以降地域別・職能別の各種協会が続々と生まれ、
1950年にはシカゴに全国大学事務職員連盟を形成
し、大学事務職員の地位の向上をたえず心がけて
いる。わが国でも見習うべき点と思われる。

最後に、参考のために、わが国の全教育機関の
非教育系職員の教育機関別の統計を付した。

(昭46, 3, 25, 記)

6. おわりに

わが国の非教育系職員数(昭和45年5月1日現在、文部省学校基本調査速報等による)

()は女子 内数

	大 学	短 大	高 専	高 校	中学校	小学校	盲学校	聾学校	養護学校	幼稚園	計
国 立	53,567 (21,474)	292 (42)	3,516 (25)	275 (86)	410 (162)	614 (370)	47 (28)	38 (18)	62 (31)	83 (56)	58,904 (22,292)
公 立	8,939 (5,319)	805 (228)	162 (0)	41,256 (13,737)	34,520 (21,387)	93,960 (70,761)	1,899 (1,449)	2,269 (1,614)	2,595 (1,755)	1,770 (1,447)	188,175 (117,697)
私 立	38,084 (22,397)	7,001 (4,383)	196 (23)	14,043 (7,430)	1,803 (1,159)	717 (512)	2 (1)	12 (7)	59 (44)	9,419 (5,329)	71,336 (41,285)
計	100,590 (49,190)	8,098 (4,653)	3,874 (48)	55,574 (21,253)	36,733 (22,708)	95,291 (71,643)	1,948 (1,478)	2,319 (1,639)	2,716 (1,830)	11,272 (6,832)	318,415 (181,274)

(資料)

昭和45年度私大研究設備整備費補助金によって購入された図書資料一覧

図 書 資 料 名	金 額	代表申請者(申請部門)
大英帝国議会報告書 (British Parliamentary Papers. "Blue Book" Irish Univ. Press)	10,900,000円	高 村 象 平 (特別)
France Archives Parlmentaires de 1787 a 1860. (Recuil complet des legislatifs et Politiques des Chambres Françaises) Ser. I : v. 1—82, covering years 1787—1794. Paris. 1867—19 13. Rep. ed.	1,070,000	平 山 栄 一 (一般・人文科 学系)
Mind ; A Quarterly Review of Psychology and Philosophy. Old series, 5. 1—16. Australasian journal of Philosophy v. 1—44. Hobbes. T. works. 11 vols.	154,000 329,000 115,000	宮 崎 友 愛 (一般・人文科 学系)
Reportorium für Kunstwissenschaft. Ed. by Adolf Woltmann, Franz Schestay, Hubert Janitsches, Henry Thode, Hugo von Tschudy, Karl Koetschar, Wilhelm Saetzold. Bd. 1—52 (1876 —1931).	670,000	八 代 修 次 (一般・人文科 学系)
Statistik des Deutschen Reichs Alte Folge 1873—1884. 94 Bde. Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung ; Wochenbericht. Jg. 6—15 (1933—1942), Ohne Jg. 11, 9 Bde. (cont.)	550,000 180,000	尾 崎 敬 (一般・社会科 学系)
Réforme sociale. Société Economie Sociale. Unions de la Paix Sociale. Paris. Ser. 1—5 (1881—1904)	630,000	
Radical periodicals in the United States.	661,600	
Bank Archiv. Jg. 7—43. Heft 1—6 1908—1942, und Bankwirtschaft 1943—1945. 37 vols.	570,000	
有価証券報告書 第二部上場会社 (昭和40年度～44年度) マイクロ フィッシュ版 Insurance Law Journal. Nos. 249—467, 1943—1961. Reprint. Paper bd. Mensch und Arbeit. Zeitschrift für Schöpferische Betriebsfuh- rung. Jg. 1—11	540,000 198,000 130,000	和田木 松太郎 (一般・社会科 学系)
Pravda. 1917—1955. Micro-Film (101 reel) Corpus Reformatorum. Philippi Malanthonis Opera Quae Super- sung Omnia. 28 vols. Halle. 1834—1860 太政類典・公文類聚 (マイクロフィルム版) 第 1 篇 (自慶応3年至明治4年7月) ~ 第2篇 (保民・2) (自明治4年8月至10年) ポジティブ35mm 70リール Verhandlungen des Deutschen Bundestages : Bundestag. Steno- graphische Berichte. 42 Bde.	753,500 418,000 383,000 486,100	伊 東 乾 金 子 芳 雄 (一般・社会科 学系)
毎日新聞 マイクロ版 明治5年 (創刊) より昭和5年末まで全368リール	1,200,000	生 田 正 輝 (一般・社会科学系)



アメリカの大学図書館での経験

森 園 繁

(三田情報センター
パブリック・サービス部閲覧課)

(1) メリーランド大学図書館

私の滞在致しましたメリーランド州立大学は首都ワシントンの北方に位置します。ホワイトハウスの近所でグレイハウンドにのり約30分、College Park でおりと、そこが即ちメリーランド大学で、その名の通り大学以外なにもない所です。学生数は3万名強、いわゆる総合大学で文化系理工系双方の学部いろいろです。メリーランド大学は首都ワシントンの政府機関に一番近い総合大学であるという地理的条件があり、極く最近までの政府の航空宇宙産業振興政策に助けられ、とくに理工学部の発展は著しいものがありました。このコンピュータ・センターはアメリカでも有数のものです。

私が勤務しておりましたのは、この大学の Main library で、名を McKeldin Library といいます。この McKeldin Library は文化系の学部及び大学院学生、教職員を対象としており、工学系利用者の為には別に工学図書館があります。その他小さな図書室が2~3ありますが、日本の大学に見る研究室のような制度は見当りません。この McKeldin Library に働いている人の数は普通250人位で、管理する蔵書は100万冊弱です。アメリカの大学図書館と日本の大学図書館との人事面での違いの一つは、アメリカでは自校の学生アルバイトの数がやたらと多いことです。私のいた課は、East Asian Collection という名称で、扱う資料は日本語・中国語・朝鮮語ですが、私達の課に廻されて始めて漢字平仮名にお目にかかるアルバイト学生が常時1~2人はいたものです。常勤職員は4人ですから、1~2人も馬鹿にならない数

となります。ところで、この East Asian Collection は米国議会図書館 (Library of Congress) の東洋部を除けばワシントン周辺では一番大きいもので、といっても現在整理された蔵書数2万3千冊、日本語の資料が大部分で、中国語資料数1千冊と若干の韓国語及び英語図書があります。アメリカにある極東関係の図書館はたいていが中国語の本が主体なのですが、メリーランドは反対に日本語の本が中心です。その日本語の本は、どこの図書館にでもあるような日本の社会科学人文科学に関する基本的参考図書があることはもちろんの事ですが、その外にこのメリーランドには他の図書館には見られない極めて特長あるコレクションが所蔵されておりますので、その事に就いて書いてみます。このコレクションは通称 Prange Collection と呼ばれているもので、この Mr. Prange は姓名を Mr. Gordon W. Prange といい、昨年日米同時封切で話題をよんだ映画「トラトラトラ」の原作者です。どうして彼の名がついたかと申しますと、この日本語の資料を日本から米国に運んだ立役者であった為、その名にちなんで俗に Prange Collection と呼ばれているわけです。このコレクションが何故特長あるかと申しますと、日本が占領軍の支配下にあった昭和20~24年(1945~49年)の間の日本での出版物が網羅的に収集されているからなのです。その収集の範囲は人文、社会、自然科学の各分野に及び、小は一枚のパンフレットから、大は全集に至るまで実に広範囲にわたっております。当時の占領軍の検閲制度はかなり大幅なものであった事と思われまじし、レコード、映画フィルム、放送用原稿、博士

論文原稿等々もその対象になった事でしょうが、今あげたレコード云々のような資料は別のどこかに保存されているものと想像しますが、とにかくそれはひとまず置き、当時の出版事情からして文字として印刷された出版物が一大コレクションとして米国の東岸の一州立大学に十数年眠っているのは誠に不思議な気がします。このコレクションは大別すると、①単行本、②新聞、③雑誌、に別けられる訳ですが、その数は非常なものであり、いずれもまだ整理が完全ではないため正確な数はつかめませんが、概略、単行本5～6万冊、雑誌1万タイトル、新聞1万タイトルに近い数字が計算されております。このコレクションの中心は数から云えば、単行本になる訳ですが、質の点から見れば雑誌新聞類に遠く及びません。もちろん単行本の中にも今の日本では容易に手に入らないような本、たとえば文学書類の初版本などもあります。それは全体から云えば少数です。然しその少数の中にも特殊なものとして児童図書のコレクションなど極めて価値あるものもあります。日本の児童関係図書館を調べた訳ではありませんが、多分日本の戦後数年間の児童図書をあれだけ豊富に所蔵している研究施設は日本にはないものと思われまます。私も幼年時代に馴れ親しんだ児童作家、画家、漫画家の作品に彼地でお目にかかれるとは全く思いもよりました。その分野の研究者には正しく垂涎もの間違いありません。又これは少数ですが、当時の占領軍に危険と判断された書——典型的な例は占領軍の政策を批判した書ですが——で検閲を受け“delete”と赤文字で抹消された箇所のある図書があります。これはすなわち出版された時には当時の人々には抹消部分は印刷されなかった訳で、極めて興味深いものです。このように興味を惹く図書もある事はありますが、先に書きました如く新聞雑誌類の方が極めて特色ある資料で、いまだ整理が全部には行き届いていないため全貌はつかめませんが、私が少しばかり手をつけた資料の中にもこれはと思うものが多数あり、これが全部整理され研究者の利用に供せられるようになった際には、或いは戦後日本史を新しい方向から見なおす事が出来るのではな

いかと思った次第です。たとえば新聞類について見ますと、都会の大新聞は何処にでも見られるもので別に取上げるまでもありませんが、ここにはいわゆる地方紙が実に丹念に集められているのは驚きました。占領軍の政策として特に地方紙の収集に力を入れたと云う事でもないでしょうが、私達がサンプルとして選んだ2千強のタイトルから判断致しましても、現在日本では地元にもないと思われる新聞紙が多数あります。又その収集の範囲も単に一般紙と限らず、娯楽紙、政党紙、団体の新聞から果ては大学新聞にまで及びその収集の広範囲な事は、占領軍だからこそこまで出来たのだと思わせられます。昨年東京大学新聞研究所の先生がメリーランド大学のこの新聞紙の山を見て一驚され、これだけのものは日本のどこにもないと申していきまました。これ又この分野に関心ある研究者には、垂涎的となるコレクションです。ただ、これ程の内容あるコレクションではありますが、何にしる出版されてから数年もたっている上、当時の決して上等とは云えない紙質に印刷された新聞紙ですから、相当にいたんでおり、今すぐにでも何とか処理しないと死滅を待つのみと云った新聞紙も多々あります。又保存の状態も良好とは云いかねますので、今のうちにマイクロフィルムにとるとかの処理を講じないと貴重な資料が無に帰する事にもなりかねません。尚、別の例で申しますと、労働組合関係に於いてだけ取りあげてみましても、ある企業の組合が発行した資料がそのパンフレット一枚に到るまで収集されているのですから本当に驚きます。又収集に於いても、日本のある地方の新聞紙はそれほど収集されておらず、その隣の地方では良く収集されているなど、何処かに抜穴があったような感じも致します。つまり収集の徹底さと地域別、この両者の間がアンバランスで妙な感じがします。これは全くの当て推量ですが、社会主義運動が盛んな地方には取締りを強めたのかも知れませんが、又日本の各県の文化活動には自ら程度の差がありますので、それがそのまま収集の量に反映したのかも知れません。とにかく面白い現象だと思えます。

上述の新聞に就いての事は大体雑誌類に就いて

も云える事なのですが、これ又戦争後の数年間の雑誌をこれだけ（約一万タイトル）所蔵している研究機関は日本にはないでしょう。その収集の範囲も各分野に及び、おびただしい量と質です。一例を挙げれば文学同人雑誌があります。未整理の為ははっきりしたタイトル数は判り兼ねますが、その量の多いのには全くウンザリした事でした。都会と地方の別なく、老若男女を問わず、詩に文章に明日の日本を明るく歌いあげている作品を目の前に致しますと、「リンゴの歌」のイメージも浮び上り、感無量になる事一再ならずでした。特に都会では区や町の青年会、又地方では各部落の青年団の若い男女のエネルギッシュな合唱には、其の単調な技巧、月並みな表現にもかかわらず胸を打つものがあります。この文学同人雑誌の各ジャンルの雑誌だけでも、それはそれなりの価値あるコレクションとなる位の分量です。次にたとえば社会主義・共産主義関係の雑誌を見ても、非常に興味あるものが多数あります。と申しますのも先に単行本の所で“delete”の赤文字が公けに発売される前の形態の図書にある事を紹介致しましたが、この事は雑誌の場合には特に然りで、量の多いことと同時に、公けに発売される前の状態が解るのが著しい特長です。たとえば共産党機関誌の「前衛」を例にとってみますと（もっともこの例は極端な例ですので妥当性を欠く恨みもありますが、メリーランド大学のこのコレクションにはこう云う雑誌も所蔵されていると云うことでお読み下さればと思います）、この雑誌の創刊号は昭和21年2月に発売され、以後月刊誌として占領時代をとにかくにも生きのびた訳ですが、その間の事情を見ますと日本の戦後史を面の当り見る感じが致します。つまり終戦半年後にこの雑誌は創刊された訳ですが、その当時は掲載記事も検閲をフリーパスで通過しており、その状態は暫く続き、如何に革新的な論文でもそのまま掲載発売許可がおります。然し年が明け昭和22年、23年と月日が進むにつれ、検閲も厳しさを加え、或る場合にはその記事を全面削除、又或る場合にはほとんど原型をとどめない迄削除訂正してから始めて掲載許可、又或る場合には一言一句にまで赤くぬりつぶ

されてようやく出版許可、と誠に完膚なきまでに検閲が行われるようになり、たとえば「強圧的なマ元帥は云々」と云った章ですと「強圧的な」が赤く消され、その理由として“not true”（事実と反する）と云った具合です。年月日を横軸にとり、削除の頻度を縦軸にとり、平面座標でこの現象を考えてみますと、横軸に記入される占領軍の政策なり、日本政府の施政方針、又世界的に見ての冷戦の諸事件、そう云った諸項目を敏感に反映して、縦軸の削除の頻度が上下するのが如実に見られるのは興味津々たるものがあります。特に昭和22年中期頃からグラフが上昇、23年に入ると急カーブに上昇して行きます。特にこの「前衛」の場合には、時には、作者の原稿まで立派に保存されておりますので、原稿、ゲラ刷り、そして発売された雑誌の3つを比較対照することが出来ますので、単に出版検閲制度を研究する点からのみならず、もっと別の観点、戦後日本政治史、社会主義運動史、と云った点からも面白い研究が出来そうな気がしました。又現にこの「前衛」などを中心にして、このメリーランド大学の資料を中心に日本の検閲制度を研究している若いアメリカ人（彼はドクター論文の完成を目ざしているのですが）もいる所を見ると、その研究の成果はともかく、この貴重なコレクションを使用しての最初の成果はアメリカ人の手に成るのではと懸念致します。尚この原稿なりゲラが検閲された場合、その個所の英語訳と検閲者のサイン入りの検閲削除理由が添付されている場合がありますので、それが



McKeldin Library の全景

又一層このコレクションの価値を高める所以です。又この雑誌類は、新聞と違いかなり整理が進み、一応閲覧利用出来る状態に近づきつつあります。

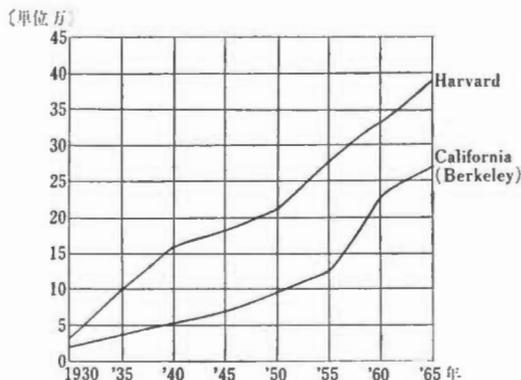
(2) アメリカの大学における極東関係図書館の運営

メリーランド大学の East Asian Collection を管理運営している librarian に就いて書いてみますと、現在 professional librarian が 2 人, library trainee が 1 人おります。又他に clerk 1 人, パートタイムのアルバイトが 2~3 人, 常時総勢 6~7 人です。professional librarian の内訳はアメリカ人と中国人で, library trainee によりやく日本人が入っています。アメリカの社会では、このプロとノンプロの別がなにかとやかましく、それは大学図書館も例外ではないのですが、ここの East Asian Collection に関してだけは、trainee がプロの仕事も行っております、と云うよりやらなければならないような工合です。と申しますのも、日本人の librarian がそれ文得難いと云う事情が裏にあるからです。又 East Asian Collection はその対象が日本語中国語などで書かれた資料で、欧米の librarian から見た場合余りに特殊な言語で近寄り難いため、組織上は Cataloging Department に属しているこの小さな East Asian Collection の人々はプロもノンプロもなく、とにかく図書の発注から受入れ、排架、その後の利用及び reference work、又時にはラベル貼布作業等々図書館業務は大小にかかわらず全てやらなければなりません。ですから実際上は McKeldin Library の中の mini-library な訳です。このような事は何もメリーランド大学に限った事ではなく、他の極東関係図書館でも大同小異のようです。

先に日本人 librarian が得難いと書きましたが、それを少し数の上で見たいと思います。それには、アメリカの library school に学んだ学生数を挙げて参考に供したいと思います。中国及び朝鮮人の数も併記しますと、少し年度が古いのですが、下表の通りです。

	日本人	中国人	朝鮮人
1946~64年間の卒業生	108	419	42
64~66年間の卒業予定者	16	153	19
計	124	572	61

中国人572人に比べますと日本人124人ははなはだ少く、現在70~71年度にはこの差はますます開いているものと思われます。又一方アメリカでの極東関係の資料の激増振りは驚くべきもので、今アメリカを代表する University of California (Berkeley) と Harvard University の極東関係資料の最近の成長をグラフで見えますと次のようになります。両大学とも概略が中国語、 $\frac{1}{2}$ が日本語資料です。



このグラフで見ますと両大学共にほぼ10年間で資料が倍増しており、その激しさを物語っております。この数字の増加振りはこの両大学に限った事ではなく、Library of Congressをはじめ、Columbia, Michigan, Chicago 等々でも同様の現象が見られる事を考え合わせますと、日本人 librarian の需要はますます切実なものとなる訳です。日本人 librarian の場合とは反対に他の国、たとえば中国人の場合には仲々職を見つけるのが困難な程で、私はメリーランド大学の library school で3人の中国人同期生を知っていますが、卒業間近になるまでその3人は職探しに実に四苦八苦しており、幸い3人共に就職出来ました、自分の仕事を一番いさせる極東関係の仕事はつい

に見つからず、他の部門でアメリカ人の仲間に入って一緒に仕事をする事になり随分と大変なことだろうと想像されます。因みに同 library school は創立6年目の新しい事もあり、私が最初の日本人卒業生でした。それやこれやの事情もあり、「物は少きを以って貴しとする」の原理に従い、日本語が読めて話せて書けると云う日本では全く当然の事が彼地では一番の武器になる訳ですが、それにしてもアメリカ人研究者が私達に質問して来ることがものすごく幅広い事は暫く措くと致しましても、その質問の程度が高い事には驚くものがあります。たとえばこれは学生の例ですが、首都ワシントン郊外に Georgetown 大学があり、その日本語科の学生2人がよく私達の資料を利用しに来ていましたが、当時Sさんは24~5歳で修上課程、Bさんは21~2歳で学部課程、2人とも日本に留学した経験を持ち日本語を話すその話し方はまず美事と云うより外ありません。1~2年の留学期間に難解な日本語をマスターしたその努力には頭が下がります。その日本語、日本文学に打ち込む態度も誠に真剣で、たとえばBさんの学上論文のテーマは紫式部と清少納言の性格を比較研究したもので、40枚という大部の論文を

書き上げて喜んでおりましたが、それが全文日本語で書かれた事を知った時には驚きを新にした事でした。そこで日本人 librarian はたとえ相手が学生の場合でも相当高度の質問に答える覚悟が必要であると同時に、単に library school での授業で満足してはいけなないので日本の文学、美術、歴史、又最近では経済及び政治情勢にも絶えず最新の情報を得よう注意を払い、尚その上にある一分野では specialist たらねばならないと感じた次第です。この specialist としての要求は今後ますます高まる一方でしょう。又これは日本語なり中国語なりが普通のアメリカ人には全く暗号みたいなものですので、その資料の重要性を図書館長なり大学の理事連に理解して貰い、そのコレクションの管理運営に必要な予算とか人事を動かすには、非常な行政的手腕をも必要とされる事をも知らされました。この点では現状では中国人の方に分があるように思われます。

[筆者は昭和43年7月から2年あまりの間、米国のリーランド大学大学院において図書館・情報学を学ぶとともに、同大学図書館において現場研修を受け、昨年10月帰国したが、本稿はその留学体験をまとめたものである]

ニ ュ ー ス

《工学図書館》

☆矢上台の新工学図書館への移転計画

新工学図書館は今年8月末に完成の予定である。従って、新図書館への移転は9月末までに完了し、10月から新図書館を部分的に開館するが、明年3月までの間は小金井の旧図書館の業務も部分的に継続される。明年4月を以て矢上台の新工学図書館すなわち理工学情報センターを正式に開館する。

☆工学図書館副館長代行者

工学図書館副館長高橋吉之助君が本年度の特別研究休暇制度の適用を受けるため、その期間の副館長職務代行者として須網哲夫君(工学部教授)が任命されることとなった。

☆特許公報等の管理委託の指定

本年1月の新特許法施行にともない、公開公報等が7月以降公刊されるが、工学図書館は改めてこの管理

委託図書館に指定された。これにより新特許法のもとで公刊される全部の特許公報類が工学図書館で閲覧できることになる。

《日吉図書館・日吉研究室》

☆日吉情報センター設立準備

日吉情報センターは明年4月の発足をめどによいよ本格的に準備が開始されている。まず、日吉情報センター設立のための重要事項を審議するために日吉情報センター準備委員会が設置され(P.31参照)、すでに活発に活動を開始しているが、これと並行して、日吉図書館および日吉研究室の職員への説明会等も行なわれた。

☆日吉図書館副館長の更迭

日吉図書館副館長村田碩男君の任期満了に伴い、昭和45年10月1日付で新たに三沢進君(法学部教授)が後任副館長として就任した。

研究・教育情報センター

年 次 統 計 資 料

昭 和 45 年 度

I 図書費及び製本費 II 蔵書統計 III 利用統計
IV 会議一覧 V 刊行物一覧 VI 委員会名簿

I : 図 書 費 お よ び 製 本 費

	図 書 費		製 本 費	
	45 年 度 (実績)	46 年 度 (予算)	45 年 度 (実績)	46 年 度 (予算)
三 田 情 七	81,709,145	88,501,000	7,480,000	7,708,000
図 書 館	38,589,000	41,290,000	3,080,000	3,000,000
研 究 室	42,410,000	47,211,000	4,400,000	4,708,000
特定基金(久保田)	710,145			
日 吉 図 書 館	6,529,025	6,288,000	712,000	715,000
臨時部(理科等)	5,408,935			
補助金(神奈川)	520,080			
補助金(神奈川)	600,010			
日 吉 研 究 室	8,745,000	9,400,000	847,000	906,000
臨時部	8,545,000			
臨時部	200,000			
医 学 情 七	15,462,912	15,550,000	1,124,000	1,225,000
臨時部(理科等)	14,100,000			
臨時部(理科等)	819,490			
特定基金(草間)	543,422			
工 学 図 書 館	9,678,724	9,170,000	617,260	800,000
図 書 館	6,900,030			
研 究 室	1,730,624			
臨時部(理科等)	960,000			
特定基金	88,070			
計	122,124,806	128,909,000	10,780,260	11,354,000

Ⅱ：蔵書統計

1. 年間増加及び所蔵冊数

	年 間 増 加 (冊)						累 計 (冊)		
	単 行 本			製 本 雜 誌			単 行 本	製 本 雜 誌	合 計
	和	洋	計	和	洋	計			
三田情セ 図書館 研究室	9,799 6,841 2,958	11,909 4,402 7,507	21,708 11,243 10,465	— — —	— — —	10,734 3,500 7,234	686,510 519,904 166,606	(73,572) 73,572 ?	(760,082) 593,476 (166,606)
日 吉 図書館 研究室	3,546 2,017	372 2,651	3,918 4,668	538 209	17 812	555 1,021	66,547 65,680	5,295 9,316	71,842 74,996
医学情セ	793	745	1,538	586	1,634	3,758	31,901	73,674	105,575
工学図書館	1,146	319	1,465	167	895	1,062	29,979	15,783	45,762
合 計	17,301	15,996	33,297			17,130	880,617	(177,619)	(1,058,257)

2. 逐次刊行物—カレント

	和	洋	計(種)
三 田 情 セ 図 書 館 研 究 室	4,859 — —	1,887 — —	6,746
日 吉 図 書 館 研 究 室	274 70	13 349	287 419
医 学 情 セ	874	1,487	2,361
工 学 図 書 館	700	647	1,347
計(種)	6,777	4,383	11,160

Ⅲ：利 用 統 計

1. 開 館 状 況

	開館日数	開 館 時 間 *	
三 田 情 セ 図 書 館	289	9 : 00 ~ 21 : 00 (月 ~ 金) ;	9 : 00 ~ 19 : 00 (土)
研・書庫棟	290	9 : 00 ~ 18 : 00 (月 ~ 金) ;	9 : 00 ~ 16 : 00 (土)
日 吉 図 書 館	288	9 : 00 ~ 18 : 00 (月 ~ 金) ;	9 : 00 ~ 16 : 00 (土)
研・書庫	—	9 : 00 ~ 16 : 30 (月 ~ 金) ;	9 : 00 ~ 14 : 30 (土)
医 学 情 セ	338	9 : 00 ~ 20 : 00 (月 ~ 土) ;	12 : 00 ~ 17 : 00 (日)
工 学 図 書 館	282	9 : 00 ~ 18 : 00 (月 ~ 金) ;	9 : 00 ~ 16 : 00 (土)

* 夏季・冬季休暇期は多少の変更あり

2. 閲 覧 ・ 貸 出 冊 数

	館 外 貸 出 (冊)				館内閲覧 (冊)
	教 職 員	大学院生	学部学生	計	
三 田 情 セ 第一閲覧 (図)	5,695	3,042	10,668	19,405	68,237
*第二閲覧 (研)	1,249	1,150	×	2,399	開 架
日 吉 図 書 館	816		6,673	7,489	32,909
研・書庫	○	×	×		開 架
医 学 情 セ	○	○	○	35,462	全開架
工 学 図 書 館	○	○	○	20,569	全開架

* 9月～3月の7ヶ月間の統計

Ⅳ： 会 議 一 覧

1. 情報センター協議会

- 4・13 情報センター所長及び三田情報センター所長の候補者推薦, ほか。
12・11 医学情報センター規程の審議, ほか。

2. 本部運営委員会会議

- 5・13 四谷 医学情報センター発足のための準備作業, 各地区の現況報告
7・3 日吉 日吉図書館及び研究室の視察, 各地区の現況報告
10・30 三田 各地区の現況報告
3・22 三田 日吉情報センター計画の打合せ, 各地区の現況報告

3. その他の関連会議(学内)

- 5・22 三田 私立大学図書館協会レファレンス分科会
6・25 三田 私立大学図書館協会研究部会逐次刊行物分科会
9・18 三田 国会図書館長と大学図書館長との懇談会
10・1 三田 日吉主任者との懇談会
10・20 三田 研究所(三田地区)関係者との懇談会
11・30 四谷 関東地区医学図書館協議会
12・22 〃 医学部評議会にて医学情報センター規程等についての説明

4. その他の関連会議(学外)

- 5/13~14 東京 大学図書館未来像セミナー
(日本図書館協会主催)
石川, 渋川
7/2~3 熱海 新著作権法講習会
(文化庁主催)
孫福, 天野
7/21~23 専修大 私立大学図書館協会総会
高鳥, 石川ほか
8/19~21 北海道大 日本医学図書館協会
研究集会(東日本地区)
佐藤, 松岡; 津田(講師), 松村(講師)
9/16~19 軽井沢 大学図書館研究集会

(私大連盟主催)

安西, 奥泉

- 10/6~8 横浜市大 日本医学図書館協会年次総会
外山, 津田ほか
10/13~16 東大 大学図書館職員講習会
(文部省主催)
東田, 熊田, 横田, 梅¹⁾, 中沢
11/11~13 広島 日本図書館協会全国大会
高鳥, 安西, 丸山, 須田, 渋川

Ⅴ： 刊 行 物 一 覧

A) PR誌, 館報, 研究誌

1. KULIC No.1 本部
2. 研究・教育情報センター・ニュース
No.1~6 本部
3. Library System Vol. 9, No.1~3 医学情セ

B) 書誌, 文献集

4. 文献シリーズ No.10 (手形法・小切手法)
三田情セ
5. 〃 No.11 (経済学関係記念論文集記
事索引) 三田情セ
6. 医学教育文献速報 Vol. 1, No.6~
Vol. 2, No.5 医学情セ
7. 図書館学・ドキュメンテーション文献集
月1回 医学情セ

C) 新収図書目録

8. 海外雑誌目次速報(経・商関係)
月2回 三田情セ
9. 収書速報 月2回 三田情セ
10. コンテンツ速報 月3回 医学情セ
11. New Book List 月1回 医学情セ

D) 蔵書目録, その他

12. 増加雑誌目録 工学図
13. テクニカル・サービスマニユアル 3部 三田情セ
業務マニユアル
14. スタッフ・マニユアル 6編 医学情セ

VI：委員会名簿（46年度）

◎研究・教育情報センター協議会

情報センター所長
 文学部長
 経済学部長
 法学部長
 商学部長
 医学部長
 工学部長
 大社研究科委員長
 文学部 教授
 同上
 経済学部教授
 同 助教授
 法学部 教授
 同上
 商学部 教授
 同上
 医学部 教授
 同上
 工学部 教授
 同 助教授
 文学部教授（大社）
 情報科学研究所長
 塾 監 局 長
 日吉図書館副館長
 日吉研究室運営委員長
 医学情報センター所長
 工学図書館副館長代行
 三田情報センター副所長
 医学情報センター副所長

高 鳥 正 夫
 沢 田 允 茂
 中 鉢 正 美
 伊 東 乾 一
 増 井 健 一
 塚 田 裕 三
 森 為 可
 小 川 隆
 清 水 潤 三
 沢 本 孝 久
 島 崎 孝 夫
 高 山 隆 三
 手 塚 豊
 石 川 忠 雄
 鈴 木 四 郎
 村 田 昭 治
 牛 場 大 蔵
 嶋 井 和 世
 水 島 三 和
 日 比 野 真 一
 横 山 寧 夫
 久 野 洋
 鎌 田 義 郎
 三 沢 進
 荒 木 良 治
 外 山 敏 夫
 須 網 哲 夫
 石 川 博 道
 津 田 良 成

文学部 教授
 経済学部 助教授
 法学部 教授
 商学部 助教授
 研究室運営委員長
 研究室主事
 三田情報センター副所長
 三田情報センター
 テクニカル・サービス部長
 同
 パブリック・サービス部長代理
 有 働 勤 吉
 大 島 通 義
 太 田 俊 太 郎
 佐 野 陽 子
 島 崎 隆 夫
 松 井 継 三
 石 川 博 道
 伊 東 弥 之 助
 安 西 郁 夫

◎医学情報センター協議会

三 井 但 夫（解剖学教授）
 高 垣 玄 吉 郎（生理学助教授）
 渡 辺 力（微生物学助教授）
 渡 辺 陽 之 輔（病理学助教授）
 横 山 哲 朗（内科学専任講師）
 藤 野 豊 美（形成外科学専任講師）
 五 島 雄 一 郎（健康相談部長／内科学助教授）
 入 久 己（中央臨床検査部長／病理学講師）
 牛 場 大 蔵（微生物学教授）
 嶋 井 和 世（解剖学教授）
 鈴 木 安 恒（耳鼻咽喉科教授）
 山 本 正 雄（医学部事務長）
 津 田 良 成（医学情報センター副所長）

◎工学図書館図書委員

佐 伯 浩 人（機械工学科専任講師）
 藤 岡 知 夫（電気工学科助教授）
 日 比 野 真 一（応用化学科助教授）
 水 島 三 知（計測工学科教授）
 川 瀬 武 志（管理工学科専任講師）
 坂 田 亮（工学基礎／計測工学科教授）

◎三田情報センター協議会

文学部図書委員長
 経済学部図書委員長
 法学部図書委員長
 商学部図書委員長
 大社研究科図書委員長

清 水 潤 三
 千 種 義 人
 金 子 芳 雄
 庭 田 範 秋
 青 沼 吉 松

◎日吉情報センター準備委員会

委員長 高 鳥 正 夫（情報センター所長）
 幹 事 荒 木 良 治（日吉研運営委員長）
 “ 三 沢 進（日吉図書館副館長）

委員 箕輪 秀二 (人文科学部門主査)
 〃 西岡 秀雄 (社会科学部門主査)
 〃 山田 健三郎 (自然科学部門主査)
 〃 瀬下 良夫 (語学部門主査)
 〃 田島 一郎 (日吉主任)
 〃 小野 一郎 (日吉事務長)
 〃 海老原 正雄 (日吉図書館総務部長)
 〃 田中正之 (日吉図書館整理課長)
 〃 宮本 昭司 (日吉研究室主事)
 オブザ
 ー
 長 沢 雅男 (図書館・情報学科助教授)
 事務局 福留 孝夫 (本部事務室長代理)
 孫 福 弘 (本部事務室係主任)
 宮 本 博 光 (日吉図書館運用課係主任)

◎研究・教育情報センター本部運営委員会

情報センター所長 高鳥 正夫
 三田情報センター副所長 石川 博道
 日吉図書館副館長 三 沢 進
 日吉図書館総務部長 海老原 正雄
 日吉研究室運営委員長 荒木 良治
 日吉研究室主事 宮本 昭司
 医学情報センター所長 外山 敏夫
 医学情報センター副所長 津田 良成
 工学図書館副館長代行 須 網 哲夫
 工学図書館主任司書 大 沢 充
 本部事務室長代理 福留 孝夫
 本部事務室係主任 孫 福 弘

編集後記

◇時のたつのは早いもので、情報センター組織が発足してから今年で2年目に入りました。発足後のあわただしい業務処理に追われ、ふと気付いてみたらもう丸1年を経過していた、というのが関係者に共通の実感ではないでしょうか。

いっぽう、今年4月から医学情報センターが発足しましたが、これによって北里記念医学図書館

当時から推進して来た我が国における先駆的な文献情報サービスの内容に、真にふさわしい組織と体制が与えられることになったわけです。

◇巻頭の「情報センター2年目を迎えて」(高鳥所長)は、以上のような状況を踏まえて、過去1年間の活動についての総まとめと、今後の事業計画について述べたものです。情報センターの活動ぶりを知っていただくには、巻末の年次統計資料とあわせてご一読下さることをお奨めします。

安西論文「学生の図書館利用の一断面」は、学部学生の図書館利用の傾向実態にメスを入れたものです。今後さらに深く分析されなければ安易に断定を下せない点も少からず残されていますが、この種の調査が学部教育の方法等とのかかわりあ

いでとられ、それがやがては学部教育の向上と図書館サービスの改善を促してゆくことが望まれます。

◇本号から連載記事として「慶応義塾図書館史」が登場しました。たゆみない時の流れをふりかえり、人類の叡知の函ともいふべき図書館の足跡を再検討することは、貴重な教訓となるでしょう。

◇研究者にとって研究資金の獲得は常に切実な問題であることに変わりありません。

編集委員

本部事務室 孫福 弘
 同上 渋川 雅俊
 三田情報センター 安西 郁夫
 日吉図書館 武田 るい
 日吉研究室 宮本 昭司
 医学情報センター 沢井 清
 工学図書館 中島 紘一

本号では文部省科学研究費補助金の公募から審査・配分までの実態を調査しその結果をまとめて掲載しましたが、特に評点の要素、種目別の採択率など、申請の際の参考に供されることを期待します。

◇昭和45年度の義塾の収支決算がこのほど確定しましたが、それによると国庫補助金は総額で560百万円と伸びているものの、それを収入に折込んでも最終的に47百万円の赤字決算となっており、今後、国庫補助金の飛躍的な伸びでもないかぎり、義塾財政はさらに逼迫せざるを得ないものと思われま。

第2年目を迎えてさらに積極的な活動を推し進めようとしている情報センターにとっても、きびしい現実を感じさせられる昨今です。(孫福)